



# THE FRONTIER TIMES

[ザ・フロンティア・タイムズ]



[ 国際舞台と21世紀の和 ]

日本は1858年の日米修好通商条約によって関税自主権を奪われた上で横浜を含む5つの港を開いた。この不平等条約を回復するために長きに渡って外交を繰り返して、欧米諸国と対等の立場になったのは1911年の日米通商航海条約の締結時である。それから約100年後、奇しくも同じく横浜の地で開催されたアジア太平洋経済協力会議(APEC:エイペック)において、議長国である日本は地域経済統合の推進を図り、貿易自由化に向けて強い意欲を見せた。そして翌年2011年11月11日、日本政府は正式に環太平洋パートナーシップ協定(TPP:ティーピーピー)と呼ばれる自由貿易協定の交渉に参加する意向を表明した。これによって、日本は関税自主権を自ら放棄する道を歩み始めたと言える。

TPPは2006年に発効したブルネイ、チリ、ニュージーランド、シンガポールの4カ国が参加した環太平洋戦略的経済連携協定を発展させた協定であり、その後、アメリカ、オーストラリア、ペルー、ベトナム、マレーシアの5カ国が交渉に参加し、現在の形に至っている。TPPは環太平洋の加盟国内において、2015年までに工業品、農産品、医療サービス、金融サービスを含む全品目の関税を10年以内に全面的に撤廃し、貿易の完全自由化を目指すための協定である。関税は、国内産業の保護を目的とする側面もあるため、産業によってはTPP参加に対して否

定的な意見も根強い。参加国の実質GDPを見てみると米国が67%、日本が24%であり、二国間で91%<sup>[注1]</sup>を占めている。このことから、実質的にはアメリカとの自由貿易協定と見ることもでき、アメリカに対する警戒感を強める意見も少なくない。また、今世紀に入ってから急激な経済成長をし、それに伴ってアジアへの影響力を増してきている中国の存在も見逃してはならない。

TPPはAPECが2020年を目処に実現を目指しているアジア太平洋自由貿易圏(FTAAP:エフターブ)への架け橋となる。この新しい貿易圏の国際ルールは21世紀にふさわしいものであるべきであり、現在のAPECとTPPの基本的なルールが移行される予定である。日本が不当に国益を損なわず平和であるためにも、民主主義と国際法を遵守する国々が中心の仕組みを築き上げ、その国際舞台で日本のプレゼンスを高めることは大切なことである。

[注1] 国際通貨基金(IMF) 2010年

# ほ

 INFORMATION

## 第7回 定期演奏会のお知らせ

私

たち吹奏楽部にとって最も演奏機会の多い2学期も終盤にさしかかりました。9月の学校祭、11月の名古屋吹奏楽フェスティバルと多くの演奏活動を行ってきて、いよいよ残すは本校主催の定期演奏会となりました。毎年夏休み前から練習を始め、12月末の本番に向けて猛練習を重ねる定期演奏会は1年間の集大成となる大ステージです。今年はソリストにオーボエ奏者、宮澤香さんをお招きし、ウィルあいちでコンサートを行います。夏休みから部員一同熱のこもった練習を毎日続けてきました。ご満足頂ける演奏会にしたいと思っていますので、是非お越しください。(部長 渡辺・毛利)



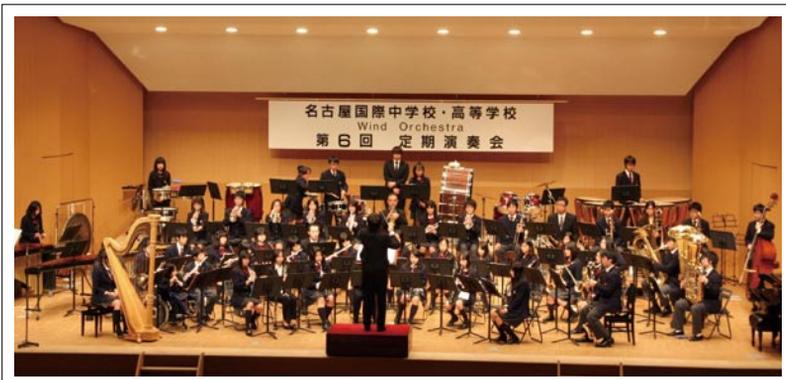
▲左/渡辺麗来さん(5年) 右/毛利夏さん(5年)

私

が着任した2004年、吹奏楽部員は高校生11名、中学生2名の13名からのスタートでした。そして早7年が経ち定期演奏会も第7回を迎え、部員も留学中・留学生を合わせると52名になりました。吹奏楽にはいろいろな楽器が入っています。フルート、クラリネットなどの木管楽器、ホルン、トランペットなどの金管楽器、そして様々な種類の打楽器。管楽器はそれぞれ個人レベルでさらに受け持ちのパートが細分化され、それらが全て一つとなって音楽が紡ぎだされます。言い換えれば一人一人の演奏者が大きな時計の中の小さな歯車、きちんと正確に回っていないと大きな時計は正確に動かないのと同じです。演奏者全員が正確に歯車を動かすのはとても難しいことなのですが、ひとたび正確にかみ合うと、えも言われぬ感動が生まれます。私たちは常にその一瞬の感動を探して、毎日練習しています。(吹奏楽部顧問 武藤浩司)



- 日時:2011年12月25日(日)
- 場所:ウィルあいち  
地下鉄「市役所」駅 2番出口より東へ徒歩約10分  
名鉄瀬戸線「東大手」駅南へ徒歩約8分
- 入場無料
- 指揮:武藤浩司(吹奏楽部顧問)
- ゲストソリスト:宮澤香(オーボエ奏者・中部フィルハーモニー交響楽団)
- プログラム:
  - 第1部 \_\_\_\_\_  
アルヴァマー序曲(バーンズ)/秋の独り言(バーンズ)  
パガニーニの主題による狂詩曲(ラフマニノフ)
  - 第2部 \_\_\_\_\_  
ソロ&アンサンブル演奏
  - 第3部 \_\_\_\_\_  
サンチェスの子供たち/スペイン/アルセナール(卒業生バンド)  
ディープ・パープル・メドレー/ミュージカル「ミス・サイゴン」他



NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR &amp; SENIOR HIGH SCHOOL

## WIND ORCHESTRA

## 第7回 定期演奏会

日 時： 2011年12月25日(日)

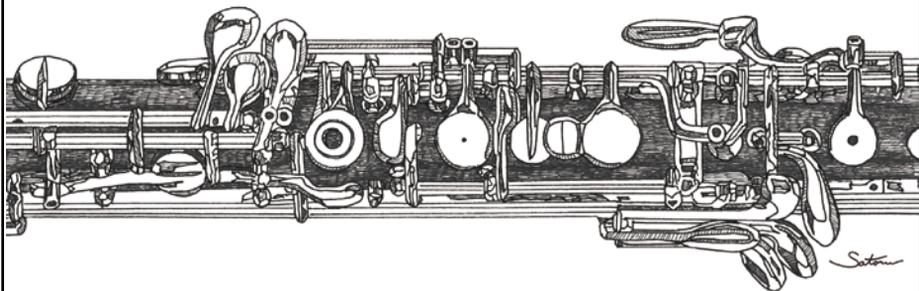
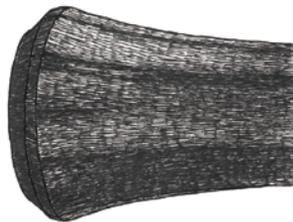
12:30 開場 / 13:00 開演

場 所： ウィルあいち

地下鉄名城線「市役所」駅 2番出口より東へ徒歩約10分

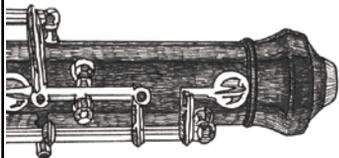
名鉄瀬戸線「東大手」駅 南へ徒歩約8分

\*公共交通機関をご利用ください。



指 揮：武藤 浩司 (吹奏楽部顧問 / Flugelhorn Solo)  
 ゲストソリスト：宮澤 香 (Oboe Solo・中部フィルハーモニー交響楽団)  
 プログラム：バガニーニの主題による狂詩曲 (ラフマニノフ)  
 秋の独り言 (バーンス)  
 ミュージカル「ミス・サイゴン」より (シェーンベルグ) 他

入場無料

名古屋国際 中学校  
高等学校

NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR &amp; SENIOR HIGH SCHOOL

〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町1-16 ☎052-858-2200 www.nihs.ed.jp

HOT!

NEWS

# スイス連邦 Collège du Léman (コレージュ・デュ・レマン) スキープログラム開催のお知らせ

**充** 実してきた海外提携校との交流ですが、このたび、スイス連邦のCollège du Léman(コレージュ・デュ・レマン)とのコネクションに成功しました。同校は、国際機関や各国代表部のある地区に近いジュネーブ郊外に位置し、80ヶ国以上の国から来た生徒約2,000名が在学する名門のインターナショナルスクールです。下記の要領で、同校が主催するスキープログラムに参加する生徒(中学3年生以上)を募集します。☒

開催期間 \_\_\_\_\_

2012年2月18日(土)~2月25日(土)

場所 \_\_\_\_\_

スイス連邦Crans-Montana  
(クランモンタナ)

募集定員 \_\_\_\_\_

5名(男女 中3~高2)

費用 \_\_\_\_\_

1,600スイスフラン(渡航費用は別途)

その他 \_\_\_\_\_

現地ではすべて英語での生活です。この期間の本校での扱いは公欠とします。スキーまたはスノーボードを選択できます。詳細は中高一貫職員室Richard先生まで。



# Feature

海外の大学に入学できるレベルまでTOEFL®やSAT®のスコア向上を目指し、昨年度から高校生を対象に開講しているGLP(Global Leadership Program)。11月からは新たに、TOEIC®のスコアアップを目標にした、中学生対象の「JUNIOR GLP」がスタートしました。厳しい選考基準をクリアして新講座に挑戦するのは6名の生徒たち。第一回目の授業が行われる直前に、実戦的な英語力を磨こうと希望に満ちた国際生に意気込みを聞きました。

## TOEIC®に向けた 実践スキル鍛える 「JUNIOR GLP」開講!

### 生徒の希望からスタートした英語特別講座

中学生を対象に11月に開講した「JUNIOR GLP」は、毎週水曜の放課後に行われる英語の特別講座。週に6～7時間ある授業に加え、さらなる英語学習の機会を用意したことには、どのような狙いがあるでしょうか。

**TIMES**：「JUNIOR GLP」開講の背景を聞かせてください。

George校長：高校では既に昨年度から、海外の大学進学に必要なSAT®やTOEFL®のスコアアップを目標にした「GLP」という講座が行われています。中学にはTOEIC® Bridgeの受験対策のための授業がありますが、意欲的な生徒からは「より高いレベルに挑戦したい」という声も届けられていました。生徒の希望に応える、より充実した英語学習の機会を提供するために、中学校に「JUNIOR GLP」を開講しました。

## 「共通の目標はTOEIC®のスコアアップ」

生徒の熱意を受けて誕生した「JUNIOR GLP」。その講座の内容について担当の Fern EDEBOHLS先生に話をうかがいます。

**TIMES:** 「JUNIOR GLP」の目標を教えてください。

Fern先生: 週に1度、45分の講座を通して英語力を高め、生徒それぞれのTOEIC®のスコアを上げることです。

**TIMES:** 現在、何名の生徒が受講していますか？

Fern先生: 受講基準はTOEIC® Bridgeのスコアが130点以上(または同等の英語力がある)の生徒です。本校生徒全体の平均スコアがおおよそ105~110点ですので、かなり選考基準を高く設定しています。現在、資格を満たした23名のうち6名が受講しています。

**TIMES:** 具体的な講座内容は？

Fern先生: 始まりの10分ほどを使って英語で日常会話をし、その後に教材を使ってリスニングとリーディングの問題に取り組み、バランスよく英語力を高めます。なかでも、TOEIC®ではハイレベルな英文読解力が求められますので、リーディングには特に力を入れています。過去に出題された問題やオリジナルの教材を組み合わせ、毎回、多くの時間を割きながら英文読解力を向上させていきます。また同時に、時間の使い方といった、効果的にスコアを獲得するための「試験スキル」の指導も行っていきます。



▲「JUNIOR GLP」担当のFern EDEBOHLS先生



▲左／小松崎貴介君(3年)、右／横地華さん(2年)

一定レベル以上の英語力があり、さらに高みを目指そうとする向上心を持った生徒たちの力を伸ばしていくことを目標にした「JUNIOR GLP」。より実践的で充実した講座内容に、生徒の期待も膨らみます。

**明確な目的意識と高い学習意欲を持って参加する生徒  
TOEIC®のスコアアップという共通の目標のもとに集まった生徒たちですが、  
「JUNIOR GLP」を受講する動機はそれぞれに異なっているようです。**

**TIMES**：受講のきっかけを聞かせてください。

小松崎君：TOEIC®のスコアを伸ばすため、特にリーディングの力を鍛えたいと思い受講を決めました。また、僕は親の仕事の関係で4~7歳と9~13歳までの計7年間をアメリカで暮らしていましたので、現在の英語力を維持していきたいという思いもありました。

横地さん：私は幼稚園から小学校入学までインターナショナルスクールに通っていたこともあり、小さな頃から英語を話すことがとても好きなんです。これまでは習っていなかった文法もしっかりと学んで、もっと海外の方と交流を深めたいと思い「JUNIOR GLP」を受講することにしました。

**小松崎君や横地さんのように、英語に対する“下地”のある生徒にとっても魅力的な「JUNIOR GLP」。一方で、中学校に入学してから本格的に英語学習を始めた生徒も、しっかりとした目的意識を持っています。**

秋田さん：今まで以上にTOEIC® Bridgeの勉強に力を入れて、少しでもスコアを上げたいと思ったことが受講のきっかけです。しっかりと勉強をして早くTOEIC®の受験に進みたいと考えています。それから、読み



▲左／秋田桃子さん(3年)、右／大原力君(3年)

書きはもちろん、話すこともできるようになりたいです。目標はあくまでTOEIC®(Bridge)のスコアを上げることですが、耳で聞くことも大事だと思うので、英会話やリスニングの時間も大切にします。

大原君：学校にはネイティブの先生たちがたくさんいて、日常的に英語を話す機会があります。ただ、現在の自分の英語力では「もっと話せたら・・・」ともどかしさを感じることも少なくありません。英会話力を磨いて、この恵まれた環境を活かしたいと思って「JUNIOR GLP」に挑戦することを決めました。

**英語を話せるようになることが、名古屋国際中への志望動機でもあったという秋田さんと大原君。「JUNIOR GLP」に対する意気込みは、小松崎君や横地さんに負けないものがあります。**



▲Fern先生と英語を使って談笑する生徒たち。もちろん「JUNIOR GLP」の授業はすべて英語で行われます。

## 将来の夢を叶えるために英語力を磨きたい！

「『JUNIOR GLP』は、出席の義務がなく出入りも自由な『English Club(クラブ活動)』とは違う課外講座。真剣に取り組んで目標を達成してほしい」というFern先生。生徒たちも週に一度の充実した講座を、楽しみにしています。

**TIMES**： これからの「JUNIOR GLP」では、どのような講座内容を期待していますか？

横地さん： あまり堅苦しい雰囲気にならず、皆で仲良く楽しみながら勉強することのできるクラスになれば嬉しいです。

大原君： 聞く、書く、話すをバランスよく身につけられる授業にしてほしいです。個人的には、不得意な「書く」部分を鍛えたい。留学などで海外の学校に行っても、書くことができないと授業で苦労すると思いますので。

**TIMES**： 最後に、将来の目標を聞かせてください。

小松崎君： またアメリカに行きたいし、英語を使っているいろいろな国を旅行したいです。

横地さん： カリフォルニアに住んでいるインターナショナルスクールの時の友達に会いに行って話がしたいです。それから母と旅行に行って通訳をしてあげたいです。

秋田さん： 留学や将来就きたい職業のようなはっきりとした目標はまだありませんが、いろいろな場所に行って、いろいろな人と英語で話がしたいです。

大原君： 僕の目標は英語力を活かせる外資系の航空会社で働くことです。

生徒全員： そのためにも「JUNIOR GLP」で、一生懸命に勉強します！

**とても意欲的な生徒たちの今後が楽しみです。頑張ってください。📌**

THE FRONTIER TIMES

## Report

# ① 第1回 MAPLE CUP 校内英語スピーチコンテスト 結果発表!

**第1**回 MAPLE CUP(校内英語スピーチコンテスト)が開かれ、予選を突破した10名が英語力や表現力を競いました。審査の結果、杉ユミさん(国際教養科1年)が見事優勝に輝きました。杉さんは「Succeeding in Japan(来日してから成功すること)」というテーマでスピーチしました。「より内容が伝わるように原稿を何度も書き直し、ネイティブの先生からスピーチ指導を入念に受けて、予選会以上の自己表現ができた」と喜びもひとしお。予選会には、26名が出演、家族のことや日常生活の見聞、コミュニケーションの問題といった多様なテーマが取り上げられました。✚



## 第1回 MAPLE CUP入賞者

- .....
- 1位 杉 ユミ**(国際教養科1B)  
テーマ「Succeeding in Japan」
- 2位 メイヤー 万里子**(国際教養科2B)  
テーマ「Dreams」
- 3位 全 珠娟**(国際教養科1A)  
テーマ「Starting Again」
- .....

## ② 保護者会(SHIP)より AEDが寄贈されました。

このたび本校の保護者会(SHIP)から、2台のAED(自動体外式除細動器)を寄贈していただき、11月28日に設置しました。SHIPの皆様、ありがとうございます。新たに設置したのは、東グランドの出入口付近と体育館2階の体育教官室前の2カ所です。以前から校舎内に設置してあるものも含めて、合計3台になりました。心室細動を起こすと、1分経過するごとに約10%助かる確率が減っていくと言われています。AEDで素早く手当することにより、助かる可能性が高くなります。とはいえ、国際生が安全に学校生活を送り、実際に使用する日がこないことを祈ります。🙏

**AED**  
Automated External Defibrillator



自動体外式除細動器



# FOCUS

## それぞれの「なぜ？」について 自分の目で確かめ、 理解を深める ギャップイヤー・プログラム

ヨーロッパを舞台に、学生自身がそれぞれに設定したテーマに基づく現地調査や、ボランティア活動をする名古屋商科大学のユニークな留学制度「ギャップイヤー・プログラム」。日本では体験できない刺激に満ちた日々は、視野をグローバルに広げ、大学生活での学習意欲の向上、さらには卒業後のビジョン構築の動機付けにもつながる、貴重な“自己発見の旅”になります。本校卒業生の多くがこの制度を利用し、国際的視野を修得して人間的に大きく成長しています。



人とのつながりの中で  
『感謝』という言葉の  
意味を知りました

名古屋商科大学  
外国語学部 国際教養学科

ちゅうじょう ともひろ  
**中條 友博**さん  
(中高一貫コース1期生)

## 夢は「国際ホッケー連盟公認コーチ」ライセンス取得！

国際生OBで名古屋商科大学3年生の中條友博さんが「ギャップイヤー・プログラム」に参加したのは大学2年生の時。「どちらかと言えば“考え方の堅かった”友人が、帰国後に自由な発想で考え行動をするようになったことに、「なぜ？」と疑問を抱いたことがきっかけでした。

独自のテーマについて自分の目や耳で調査をする「ギャップイヤー・プログラム」。本校の中高一貫コース1期生で、フィールドホッケー部の創設メンバーだった中條さんのテーマは、「フィールドホッケーにおける日本とヨーロッパの違い」を考察することでした。およそ3ヶ月の滞在期間中には、競技の盛んな6～7ヶ国を中心に各国の競技場を訪ね、さまざまな人に会い、インタビューを重ねました。現地で感じたのは競技に親しむ環境が、日本と大きく違っていたこと。「ヨーロッパでは地域にあるスポーツクラブに入会すれば、誰もが気軽に競技を楽しめるシステムになっていますが、日本では学校や企業チームに所属しなければプレーができません。各国のクラブチームや代表チームのコーチからも話を聞きましたが、競技が文化としてしっかりと根付いている点が決定的な違いだと感じました」。さらに印象的だったの



は、そうしたスポーツクラブには子どもから高齢者まで幅広い年代の人が集まり、家族ぐるみで交流を楽しんでいることでした。「母親同士の交流の場になっていたり、ビジネスのきっかけにもなったりと、社会形成の場として存在していることも、自分にとって新鮮な発見でした」。

フィールドホッケーという調査テーマに関してだけでなく、「ひとりの人間として成長するきっかけにもなった」という現地での生活。とりわけ「人と人とのつながり」には大きな感銘を受けました。「日本では当たり前だったが、海外では当たり前でないこともたくさんあります。途方に暮れることが何度もありましたが、困っている時にはいつも協力を申し出してくれる人がいました。その日の宿泊先が決まっていなかった初対面の自分を自宅に迎え入れてくれたり、海外で人のやさしさに触れ、改めて『感謝』の意味を理解できた気がします」。

現在はコーチとして本校フィールドホッケー部の後輩指導に当たっている中條さんの将来の目標は、国際ホッケー連盟公認コーチのライセンスを取得すること。中学・高校時代に培った“フロンティア・スピリット”と貴重な海外での経験を糧に、日本人では初めてとなる目標に向かって歩み続けています。✚



Visiting the

# Laboratory

 [大学研究室訪問]

## 成功の背景にあるロジックを 読み解くマーケティング論

学部の枠を越えて、多くの学生が受講している「マーケティング基礎」の講義。戦略的な事柄を中心にマーケティングを基礎から学ぶこの入門講義は、実際に社会で起きているさまざまな事例を題材に取り上げた「理解しやすさ」が特徴で、名古屋商科大学に数ある講義の中でも、特に人気が高い授業の一つとして知られています。講義を担当する小野裕二教授に、マーケティングという学問分野の魅力や、大学での学びについてお話を伺いました。



### マーケティング論は 人としての生き方につながる

名古屋商科大学 商学部

おの ゆうじ  
教授 **小野 裕二** 先生

小野裕二教授が担当する「マーケティング基礎」は、文字通りマーケティングの基礎理論を学ぶ入門講義。実際の社会で起こっているさまざまな事例を題材にして、マーケティングの仕組みを分かりやすく理解できることから、毎年多くの学生が受講を希望します。「マーケティングとは簡単な言葉で言い換えれば『いかに商品を売る仕組みを作るか』ということ。講義では、その時々々の経済トピックスや具体的な商

品や企業の事例を紹介しながら、マーケティング的なものの見方や考え方を養い、実際にビジネスの現場で役立てられる内容になるよう心がけています」と小野教授。理論を頭で理解するだけではなく、事例分析をバランスよく組み合わせることで、学生はベーシックな理論を学びながら、現在のビジネス界の動きやマーケティングという学問分野のスケール感を、肌で感じることができます。

## ビジネス界の動向やスケール感を感じさせる 「分かりやすい講義」

国際生OBで、現在は名古屋商科大学大学院マネジメント研究科で学んでいる杉浦圭さんは、小野教授の講義について次のように話します。「大学の講義というのは、目的意識を持たなければ、話を聞くだけの“受け身”な学びになりがちです。小野先生が担当する「マーケティング基礎」では、講義の最初にその日に学ぶことに関するクイズが出されるなど双方向の関係が構築されていて、知識を吸収するだけに留まらず、一人ひとりが『講義に参加している』という実感を持ち、積極的な姿勢で講義に臨むことができます。大学1年生で受講した後も、聴講生として毎年「マーケティング基礎」の講義を受け続けたという杉浦さん。「内容も少しずつ変化があり、いろいろな業界のイノベーションを知ることができるのが小野先生の講義の魅力。常に最新の事例について学ぶことができるので、自分のように単位とは関係なく受講する学生も数多くいました」と杉浦さん。大学院に進学し、よ

り深くマーケティングを学んでいる現在も、靴の中には「マーケティング基礎」のテキストが必ず入っているそうです。

そんな杉浦さんに対する小野教授の評価は「ガッツがあり、相手の意見や価値観の違いを認めつつ、自分の考えをしっかりと主張できる学生」。マーケティングの世界では、既成の枠を越えて物事を捉えられる柔軟な思考や協調性、発進力など様々な能力が求められます。「私の講義では、カップヌードルの世界進出の事例や、学園創立の精神『フロンティア・スピリット』に関連させたコンビニの立ち上げ戦略の事例などを題材に取り上げることもあります。少子高齢化の時代の日本経済を考えた時、企業はより積極的に世界に進出しなければならず、そこで堂々と渡り合える人材が今後ますます必要になっていきます。国際感覚を持ち、開拓精神に溢れた杉浦君のような学生を一人でも多く育て、名古屋商科大学から世界に送り出していきたいですね」。



## 厳しくて人気のある「小野研究室」

「成功している事例には必ずロジックがあり、それを分析し、新たな仕組みを考え出すことが醍醐味」と、学問分野としてのマーケティングの魅力を語る小野教授。担当するセミナーは「名古屋商科大学で最も厳しく、最も人気が高い」(杉浦さん)ことで知られ、課題に対して各自が考えを持ち寄り、グループ討論、全体討論と、徹底的なディスカッションを行い、分析力、企画力、提案力、プレゼン能力を総合的に磨きます。「私自身も慶應大学の学

生時代に、前期だけで1万字の論文を3本書くなど、“大学で最も厳しい”と言われる研究室で懸命に学び、マーケティングの面白さを知りました。マーケティングで最も重要なことは、相手(顧客)の立場になって考えるという視点。この『相手を思い、理解しようとするマーケティングの視点』は、そのまま人間としての生き方にもつながっていることを、講義やセミナーを通じて学んでほしい」という思いを胸に、小野教授は今日も学生と向き合います。☒

## マーケティングとは

企業や非営利組織が行うあらゆる活動のうち、「顧客が真に求める商品やサービスを作り、その情報を届け、顧客がその商品を効果的に得られるようにする活動」の全てを表す概念である。企業が戦略的行動を改善する際にも積極的に使用される手法である。マーケティングについて、最も広く知られている経営学者フィリップ・コトラーによると、「マーケティングとは、製品と価値を生み出して他者と交換することによって、個人や団体が必要なものや欲しいものを手に入れるために利用する社会上・経営上のプロセスである」と定義されている。一般的な企業におけるマーケティングの主な活動は以下の4点が挙げられる。

- 消費者ニーズ、購買・消費行動の調査
- 商品・サービスの企画
- 店舗の売場づくり
- 広告宣伝の展開

## [ It's a Wonderful Life (1946) ]

**“You want the moon? Just say the word, and I'll throw a lasso around it and pull it down.”**

「月が欲しいのかい？じゃあそう言って。  
そしたら月に投げ縄を投げて引き落とすよ。」

映画公開時と同じように、その日はクリスマスイブ。貯蓄貸付組合の経営者ジョージ(ジェームズ・スチュアート)はうっかり者の叔父バリー(トーマス・ミッチェル)が銀行に預けるための8,000ドルをどこかに置き忘れ、経営破綻に直面していました。非道な町の有力者であるヘンリー・ポッター(ライオネル・バリモア)はそのお金を発見し持ち帰りました。その日は銀行検査の日で、困り果てたジョージはポッターにお金を貸してくれるよう頼みますが、銀行詐欺でジョージを逮捕すると脅します。彼はひどく落ち込み自殺を決意します。その時、まだ翼の生えていない守護天使クラレンス(ヘンリー・トラヴァース)が現れ、ジョージに自分が生まれなかった場合の町を見せます。この幻の世界では、町の名はポッター・ヴィルと呼ばれ荒んだ町になっていました。ジョージはこれまでの人生、周りの人々と支え合って生きてきたことに気づかされます。ジョージはどんなときも彼のそばにいてくれた妻に今回のタイトルにした印象的な台詞を言います。この映画はアカデミー賞の5つの賞にノミネートされました。🎄

As director Frank Capra's *It's a Wonderful Life* (1946) opens, it's Christmas Eve. George Bailey (James Stewart), who owns a bank, faces ruin. His silly uncle has misplaced a big bag of money meant for deposit. The slumlord Potter (Lionel Barrymore) finds the money and keeps it. A bank examiner is due that day. Frantic, George asks Potter for a loan, but Potter accuses George of bank fraud. George is sad and decides to kill himself. However, his guardian angel shows George what his small town of Bedford Falls would have looked like if he had never been born. It is, in this alternate reality, called Potterville, a sleazy town. George realizes how many lives he has touched positively. He decides to live his life. In the end, his many friends save him from disgrace. George says the lines above to his wife, who has stayed by his side through thick and thin. 🎄



## Visiting Africa

**Fern EDEBOHLS**

Teacher in the Integrated Six-Year Program

I came back to school this term bursting to tell people about my summer travels. I spent a month traveling through the African countries of Uganda, Rwanda and Kenya. I saw African animals galore: lions, giraffes, zebras, elephants, rhinoceroses, hippopotamuses, crocodiles, hyenas, and antelopes of every shape and size. I saw the sunrise from a hot-air balloon over the Masai Mara. I sprained my finger



white-water rafting in Uganda. I mountain biked through a national park with a guide who only had one pedal in Kenya. I stayed two days in an orphanage and came back with two Kenyan sponsor children. I hand-fed a giraffe in Nairobi. I visited sobering genocide memorials in Rwanda and witnessed that country's inspiring recovery. I was welcomed into the homes of virtual strangers. I had so many once-in-a-lifetime experiences that it is hard to single out one, but in the end, I decided to write about the experience that was at the front of my mind when I planned my trip to Africa: mountain gorillas.

Uganda, Rwanda and the Congo are the only countries in the world where you can see mountain gorillas in the wild. There are only about 780 of them remaining in the world today and poaching remains a real threat. Congo

seemed a little risky, and I had difficulty obtaining a permit in Uganda, so I decided to go gorilla trekking in Rwanda.

There are eight groups of gorillas living in the Volcanoes National Park and only eight visitors may visit each gorilla group per day. The Susa group is the largest and most famous group. It is also the most difficult to get to, because the gorillas live high up in the mountains. The rangers need to make sure, then, that they choose a group of visitors that is capable of making it to the top. We felt honoured to be assigned to the Susa group. The guide warned us that we would have a long hard trek up the mountain ahead of us, but we were so excited at being able to see the largest gorilla group that we didn't care. When he told us that there would be head-high stinging nettles and thorn bushes and that we should 'suffer in silence' we were a little more subdued.



We had an hour ride over very bumpy roads to get to the base of our mountain. The start was an easy walk through bamboo forest but it soon began to get steep, and later, slippery. Our guide was keen to move fast because the gorillas were moving away from us up the mountain. We did not have many breaks and were soon starting to feel the effects of the high altitude (over 3000m). Before long we were walking through soggy waist deep foliage, and everyone in the group had managed to fall into the nettles. Three and a half hours later we were still walking and starting to feel hungry and tired and then, suddenly, we were in the middle of gorillas. There are 40 gorillas in the Susa group and they were all around us. It was amazing and a little disconcerting. At first the gorillas kept moving and we even



had a male beat his chest at us, but after about fifteen minutes we found a group that were eating, sleeping and playing, and we settled in to watch them.

**T**he gorillas let us come quite close. Twin baby gorillas played near us, pushing each other out of a tree while a silverback male slept nearby. A mother and baby passed by. A large blackback reclined and ate a leisurely meal. It was enthralling and our hour with the gorillas passed all too quickly. The trip up had been arduous, but our elation carried us down in half the time. We arrived back at camp exhausted, filthy, bruised

and stung, and several hours later, but with an enormous sense of achievement.

**I** feel privileged to have been one of the few people to enjoy the awesome experience of spending time with mountain gorillas in the wild. This was but one of many humbling experiences in Africa. I saw so many examples of people dedicating themselves to the protection of wildlife, children and society itself during my travels. It was awe-inspiring and challenging. Once more I have been forced to re-examine my life and what I can do to be useful to humanity and our world. 🌍

# GLOBAL VISION

## Global Education for the Twenty- First Century



It is more important than ever for our schools to provide an education that will promote mutual understanding, peace, respect for differences and world citizenship. It is no longer sufficient to require students to memorize facts and information. Information is readily at hand. What education for the twenty-first century requires is the teaching of universal values such as justice, fairness, mutual respect, non-violence and reverence for all life on the planet.

The new millennium has required us to rethink the nature of education for international understanding. At our school, we have developed strong

ties with sister schools all over the world. We send our students to these schools as well as host their students. We have also explored ways of encouraging our students to think globally and of cultivating in them a commitment to mutual welfare as opposed to mutual mistrust.

Knowledge and information are accumulating exponentially. We know that our students will have as many as ten careers after they leave our school, so it is vital that they acquire the ability to learn independently and to have dialogues with their peers all over the world in an effort to solve real-world problems. 🌐

発行 **名古屋国際** 中学校  
高等学校  
NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

所在地 〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町 1-16

発行月 年間 4 回 (6 月 / 9 月 / 12 月 / 3 月)

制作 学校法人栗本学園  
名古屋国際中学校・高等学校  
学内広報チーム

デザイン cluch on cluch Co.,Ltd.

企画協力 株式会社 イーブレイン